

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：34311

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520773

研究課題名(和文) 英語圏長期留学プログラムが学生の英語力と情意面に及ぼす影響

研究課題名(英文) How does a one-year study abroad program influence students' English skills and affective domain?

研究代表者

飯田 毅 (Iida, Tsuyoshi)

同志社女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：90290212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は1年間留学を義務づけた学科の学生の英語力の伸びと情意面の変化を明らかにしたものである。TOEIC、TOEFL iBT、Versantを利用して、英語力を測定し、英語学習動機、コミュニケーションへの意欲、英語speaking不安については質問紙や面接によって調査した。その結果、留学後英語力全体は伸びたが、学術的なreading力は伸びなかった。英語学習動機は異文化交流に関する動機が高く、留学前後では変化はなかったが、留学を義務づけていない学科とは異なる動機づけを持っていた。また、留学によって、学生のコミュニケーションに対する意欲が高まり、英語speaking不安も減少した。

研究成果の概要(英文)：This study explored university students' development of L2 proficiency and their change of affective domains by a study abroad program of a particular department in which students have to study abroad for a year. TOEIC, TOEFL iBT, and Versant were used to evaluate their English proficiency. Questionnaires were used to assess students' motivation for learning English, willingness to communicate, and English speaking anxieties before and after study abroad. The results showed that though their general academic English proficiency improved, their academic reading ability remained unchanged. Results also showed that their motivation for intercultural communication is strong, which did not change between before and after studying abroad. This motivation is different from that of learners who study English intensively at home. After studying abroad, students came to have stronger willingness to communicate with people who were not familiar and to possess less anxiety to speak English.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：英語圏留学 英語力の推移 speaking, listening reading, writing メタ言語知識 英語speaking不安 WTC 英語学習動機

1. 研究開始当初の背景

経済のグローバル化が進展しつつある今日、大学教育においてグローバル化した社会の中で、活躍できる人材を育てることが求められている。現在、多くの大学でグローバル人材育成のための教育が注目を集め、実践されている。このグローバル人材育成教育と関連が深い教育の1つに大学生を海外に派遣し、異文化の中で、語学力、幅広い教養、国際性を身につけさせる留学プログラムがある。現在日本からさまざまな国に留学生を派遣している。留学派遣プログラムには3週間程度の短期の語学プログラムから2年間学生を派遣し、日本と留学先の大学の両方の学位を取得させるもの(Dual degree program)まで、さまざまな種類のプログラムが存在する。

その中で、現在多くの日本の大学が取り組んでいるものは、英語圏の大学に学生を留学させる英語教育プログラムである。また、4年間の大学教育の中に何らかの形で留学を義務づけた大学も増えている。しかしながら、そのような英語圏留学が盛んになっている反面、そのプログラムによって、学生の語学力がどの程度伸びるのか、また、学生の情意面がどのように変化するのかということについての研究は必ずしも十分ではない。グローバル人材育成のためにも、また、語学教育改善のためにも、留学によって、学生の語学力と情意面の変化について明らかにすることは意義のあることである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、留学を義務づけた学科の英語プログラムによって、学生の英語力と情意面がどのように変化するのかを事例研究の形で明らかにすることにある。特に、以下の3点の研究課題について明確にする。

- (1) 学生の入学時の英語力、1年次英語プログラム終了時の英語力、2年次留学前の英語力、3年次留学後の英語力はどのように変化するのか。
- (2) 留学前と留学後では学生の英語に対する動機づけ、コミュニケーションに対する意欲、英語を話す不安はどのように変化するのか。
- (3) 学生の英語力と情意面の変化は、留学プログラムや留学中の学習とどのような関係があり、何がどのように学生の英語力と情意面に影響しているのであろうか。

3. 研究の方法

関西圏にある留学を義務づけた学科の大学生を選び、以下のような方法で、研究を進めた。

(1) 留学前英語カリキュラムの特徴

この学科では、2年次秋学期から、3年次春学期まで1年間の留学が義務づけられているため、全体のカリキュラムが留学前、留学中、留学後の3段階に分かれている。留学前の英語教育プログラムでは、1年次に7科目

(Public Speaking I/II, Academic Writing I/II, Integrative Speaking I/II, Integrative Writing I/II, Intensive Listening I/II, Intensive Reading I/II, Pronunciation & Presentation I/II)が配置され、すべて必修となっている。2年次英語科目は3科目(Integrative Speaking III, Integrative Writing III, Extensive Reading III)。1,2年次の英語総合授業時間数は約350時間であった。

1クラス10名前途の少人数クラスを編成し、8段階の習熟度別クラスを編成する。一部のクラスを除いて、基本的には少人数クラスで授業を実施する。

英語以外の学科科目に関しても、原則として英語で授業を実施するようにしている。

(2) 留学プログラムの特徴

学生はアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの英語圏の28大学に留学する。1つの大学に原則とし5名の学生を派遣し、10名以内とする。その選考は、英語力(TOEFL iBT)の成績とGPAをそれぞれ7対3の割合で総合点を出し、総合点の高い学生の希望を優先して決定する。

学生が留学先の大学で取得した単位に関しては、原則として正規科目のみ大学の単位に読み替えられる。留学先での正規科目を受けるための準備科目である英語集中科目は原則として学生の大学の科目には読み替えができない。この学科のほとんどの学生は、留学先で、英語集中科目(ESL=English as a second language)から始め、約8割の学生が何らかの形で単位を取得してくる。

(3) 分析方法

学生の英語力及び情意面の変化を明らかにするために、以下3点の分析方法を用いた。

研究課題1の学生の英語力を測定するために、24名の学生を無差別に選び、留学前後の英語力の変化を考察した。標準化された試験であるTOEIC、TOEFL iBT、speakingの技能を測るVersantを使用した。TOEICは一般的な英語力を測定する試験として利用した。留学前2年次と留学後の3年次に実施し、ReadingとListeningの結果に分けて分析した。

TOEFL iBTは、学術的な英語力を測定するための試験であり、特に、留学先の大学での英語の授業に十分についていけるかを判断する試験である。この試験を用いて留学前1年次の6月、12月、留学後3年次の英語力を測定した。その際に、Reading, Listening, Speaking, Writingの4技能及び総合点を利用して分析した。

Versantに関しては、平成25年度に、留学前の1年次生、2年次生、留学後の3年次生に対して実施した。つまり、Versant以外は、1年次から3年次までの同じ学生の年次ごとの変化に注目し、Versantの試験は、ある年度における各学年のspeaking力の違いに焦点を当てた研究方法をとった。

次に、研究課題2の情意面に関しては、英語学習に関する動機づけ、コミュニケーションに対する意欲 (Willingness to communicate=WTC)、英語の speaking 不安の3種類の質問紙を先行研究を踏まえて開発した。その質問紙を使って、以下の3つのグループを対象として英語学習の情意面について調査を実施した。1つは、平成24年度の留学前の学生80名である。このグループは、留学後も同じ質問紙を使って調査した。この目的は、同じグループの学生が留学前と留学後ではどのような変化があるのかを見るためである。次に、平成24年度に留学から帰って来た3年次に対しても同様の質問紙を利用して調査を行った。このグループと最初のグループとの違いは、カリキュラムの違いである。平成24年度1年次であったグループは新カリキュラム、3年次は旧カリキュラムで学んでいる。新カリキュラムでは、留学の条件として最低単位数を定め、留学するための必要な科目を設定したことにある。このカリキュラム変化が情意面の変化に影響を及ぼすのであろうか。最後に、留学を義務づけたグループとそうでないグループを比較するために、英語を専門としながら国内で英語を集中的に学習するグループ(120名)を選び、同様の質問紙を用いたアンケートを実施した。

最後に、研究課題3の分析方法として、上記の24名の学生に対して、高い英語力には文法に関するメタ言語知識と動機づけが関わっていると考え、メタ言語知識試験と面接調査を実施した。前者に関しては留学前と留学後の2回実施し、後者は面接や観察を通して、調査した。英語のメタ言語知識とは、英語の文法知識に関して、誤った英文の誤りを指摘し、その理由を説明できる知識を指す。先行研究から、第2言語能力とメタ言語知識の関係が深いことが明らかになっている。

4. 研究成果

(1) 研究課題1: 英語力の変化に関して

TOEICの結果から

表1 TOEICの総合点変化

| | 最大 | 最小 | 平均 | 標準偏差 |
|-----|-----|-----|-------|-------|
| 留学前 | 870 | 370 | 627.2 | 132.4 |
| 留学後 | 945 | 630 | 781.1 | 81.7 |

表2 TOEIC ListeningとReadingの変化

| | L平均 | SD | R平均 | SD |
|-----|-------|------|-------|------|
| 留学前 | 348.5 | 66.1 | 278.7 | 76.1 |
| 留学後 | 427.5 | 40.3 | 353.6 | 53.2 |

注 L=Listening R=Reading SD=標準偏差

表1は留学前と留学後のTOEICの変化についてまとめたものである。全体の平均値が高くなったことと標準偏差が小さくなったことがわかる。表2は、ListeningとReadingに分けた場合の得点の変化を示している。Listening及びReadingの両方の平均値が留

学前と比べ、伸びていることがわかる。留学後の得点は統計的に有意に伸びている。興味深いのは、両者の標準偏差が留学前より留学後の方が小さくなっていることである。このことは、留学によって学生の英語力が全体的に伸びたばかりでなく、学生間の得点のばらつきが小さくなったことを示している。つまり、留学によって一般的な英語力が全体的に向上し、学生間の英語力の差が小さくなったことを示している。

TOEFL iBTの結果から

表3 TOEFL iBT 総合点の変化

| | 最大 | 最小 | 平均 | 標準偏差 |
|------|----|----|------|------|
| 留学前1 | 73 | 32 | 50.1 | 10.4 |
| 留学前2 | 83 | 33 | 57.9 | 10.8 |
| 留学後 | 95 | 49 | 67.7 | 10.7 |

注 留学前1=1年次6月、留学前2=1年次12月、留学後=3年次12月

TOEFL iBTの変化を24名の学生に注目して、留学前の1年次から留学後の3年次までの変化を調べた。1年次の最初(6月)、1年次の最後(12月)、留学後3年次(12月)の3つの時期の総合得点調べると表3のような結果になった。学生のTOEFL iBTの総合平均値は留学前ばかりでなく、留学後も伸びていることがわかる。

表4 TOEFL iBT Readingの変化

| | 最大 | 最小 | 平均 | 標準偏差 |
|------|----|----|------|------|
| 留学前1 | 18 | 2 | 10.9 | 4.3 |
| 留学前2 | 20 | 7 | 13.3 | 3.4 |
| 留学後 | 27 | 5 | 13.8 | 4.8 |

表5 TOEFL iBT Listeningの変化

| | 最大 | 最小 | 平均 | 標準偏差 |
|------|----|----|------|------|
| 留学前1 | 19 | 2 | 10.7 | 4.6 |
| 留学前2 | 21 | 2 | 12.7 | 4.5 |
| 留学後 | 25 | 12 | 16.7 | 3.7 |

表6 TOEFL iBT Speakingの変化

| | 最大 | 最小 | 平均 | 標準偏差 |
|------|----|----|------|------|
| 留学前1 | 22 | 10 | 14.6 | 3.5 |
| 留学前2 | 23 | 9 | 15.8 | 2.9 |
| 留学後 | 23 | 11 | 18.5 | 3.3 |

表7 TOEFL iBT Writingの変化

| | 最大 | 最小 | 平均 | 標準偏差 |
|------|----|----|------|------|
| 留学前1 | 22 | 4 | 14.1 | 4.5 |
| 留学前2 | 22 | 10 | 16.1 | 3.3 |
| 留学後 | 25 | 14 | 18.8 | 2.8 |

表4から表7は、TOEFL iBTの4技能の変化を示している。この表からわかるように、留学前の6月と12月では、4技能がいずれも統計的に有意に伸びているのに対して、留学前後ではListening, Speaking, Writingの平均値に関しては向上が見られたが、

Reading に関しては変化がなかった。また、TOEIC では留学後に Listening と Reading の標準偏差が小さくなっているのに対して、TOEFL iBT の Reading では、大きくなっていることが見られる。TOEIC では Listening と Reading の力が伸びているのに、どうして TOEFL iBT の Reading が伸びなかったのだろうか。

このことについては、いくつかの理由が考えられる。最初に、TOEIC が全般的な英語力、とりわけビジネス関係の英語力を測定するのに対して、TOEFL は学術的な英語の能力を測定しているためである。また、この学科の留学形態も影響していると考えられる。この学科では 1 年間の留学を義務づけているが、ほとんどの学生は留学先で英語集中科目から始めるため、留学先の大学の正規科目を受講するのは、2 学期または 3 学期になる。そのため、大学の正規科目を留学の最初から受講していたとは言いえない。そのため、英語の学術的な文献を読む量が不足していたと考えられる。更に、留学中の学生の英語学習を含めた全体の学習の質の違いが影響していると考えられる。質問紙の自由記述や面接の結果を分析してみると、学生達の留学中の学習及び生活は、現地地の友人や留学生との対話が多く、英語の文献を大量に読む経験が少ない。つまり、学生は一般的に現地地の学生や英語を第 2 言語として学習している学生とのコミュニケーションをとることに生活の重点を置いている。

Versant の結果から

表 8 Versant 全体得点

| | 最大 | 最小 | 平均 | SD |
|--------|----|----|------|-----|
| 1 年留学前 | 60 | 22 | 39.4 | 8.9 |
| 2 年留学前 | 49 | 31 | 39.5 | 4.5 |
| 3 年留学後 | 70 | 35 | 46.4 | 7.8 |

注 1 年次学生人数 17 名、2 年次学生 19 名、3 年次学生 32 名

表 9 Speaking 文構成力

| | 最大 | 最小 | 平均 | SD |
|--------|----|----|------|-----|
| 1 年留学前 | 60 | 20 | 39.3 | 9.6 |
| 2 年留学前 | 47 | 32 | 39.9 | 3.7 |
| 3 年留学後 | 71 | 32 | 46.1 | 8.2 |

表 10 Speaking 語彙力

| | 最大 | 最小 | 平均 | SD |
|--------|----|----|------|------|
| 1 年留学前 | 67 | 25 | 42.1 | 10.2 |
| 2 年留学前 | 54 | 26 | 42.7 | 6.6 |
| 3 年留学後 | 65 | 36 | 51.0 | 7.5 |

表 11 Speaking 流暢さ

| | 最大 | 最小 | 平均 | SD |
|--------|----|----|------|------|
| 1 年留学前 | 58 | 20 | 38.2 | 11.8 |
| 2 年留学前 | 55 | 28 | 38.3 | 7.3 |
| 3 年留学後 | 72 | 30 | 46.4 | 9.8 |

表 12 Speaking 発音

| | 最大 | 最小 | 平均 | SD |
|--------|----|----|------|------|
| 1 年留学前 | 55 | 28 | 38.9 | 11.8 |
| 2 年留学前 | 46 | 31 | 37.5 | 7.3 |
| 3 年留学後 | 72 | 30 | 42.2 | 9.8 |

表 8 は英語の speaking 技能を測る Versant の試験結果である。表からわかるように、留学前の学生の 1 年次生及び 2 年次生のグループと留学後の 3 年次生のグループの英語の全体的な speaking 技能比べると、1 年次及び 2 年次の間には、差がなかったが、留学前と留学後では、明らかに留学後の学生の方の得点が向上していることがわかる。Speaking 技能を構成している、文構成力(表 9)、語彙力(表 10)、流暢さ(表 11)、発音の技能(表 12)について分析してみると、1 年次及び 2 年次の間にはいずれも差がなかったが、留学後は留学前より向上していることがわかる。また、留学によって、speaking で必要な文構成力や語彙力が身に付き、流暢さや発音についても向上していることがわかる。

しかし、1 年次と 2 年次の間に英語を話す力の差がなかったことは、先の TOEFL iBT の speaking の試験において、留学前に speaking の技能が向上していたことと相反する。これは何を意味しているのだろうか。この学科の学生は TOEFL iBT の試験を 1 年次に最低 2 回以上受けることになっていることから、TOEFL iBT の speaking 試験の準備ができていたのに対して、今回の Versant の試験は最初の試験であることも影響していると考えられる。また、留学前に英語を実際に話すのは、主として英語の時間であるため、留学中に比べて日常的に英語を話す機会に恵まれていなかったためであるとも考えられる。

この留学によって英語を話すことに慣れるという現象は、学生の留学後の質問紙調査の自由記述からも伺い知ることできる。

留学する前は英語で話すことに抵抗があったけど、留学してからはしゃべらないと何もできないから特に抵抗もなく自然にしゃべることができるようになったと思う。今は外国人よりも日本人に英語を喋ることに少し抵抗を感じる。(学生 A)

多くの学生は、留学前に授業時間に英語を話す機会があっても、英語を話すことに不安を抱く。上記の学生 A もその一人である。しかしながら、留学を通して、自分の意志を英語で伝えることを体験する中で、英語に対する苦手意識を克服していくのである。英語を話すレベルはさまざまではあるが、以下に示す学生 B のように、どんな学生でも留学によって、英語を話す不安が減少し、最低限の自信を持って、コミュニケーションできるようになってくる。

留学前は単語や自分の言いたいことがすら

すら、正確に言えずにいたが、今では考えることも少なくなった。(学生B)

(2)研究課題2

留学前と留学後の動機づけ

因子分析(主因子法バリマックス回転)によって、同じ学生の留学前後の英語学習動機を比較し、以下の4因子を抽出した。

第1因子: 英語・異文化理解吸収

第2因子: 道具的動機

第3因子: 英語学習興味

第4因子: 将来の手段

次に、英語学習動機の因子得点の平均値を出して留学前後の時期を比較したところ、留学前と留学後では、英語学習動機に変化がないことが分かった。

留学前の学生と英語を専門としながら国内で英語を集中的に学習するグループと英語学習動機について因子分析を通して比較すると以下の4点を因子として抽出できた。

第1因子: 英語・異文化理解吸収

第2因子: 英語学習興味

第3因子: 道具的動機

第4因子: 留学

それぞれの因子得点を比較したところ、第3因子を除いて、留学を義務づけたグループの方が高かった。これは、2つのグループは同じ英語を専門としているため、英語を道具として学んでいるためである。つまり、「就職のために英語を勉強する」というような道具的な動機づけに関しては両グループとも変わらないが、その他の英語・異文化理解吸収、英語学習興味、留学という因子に関しては、留学を義務づけた学科の学生の方が高かった。このことから、同じ英語を専門とする学科であっても、留学を義務づけた学科の学生の方が、より多くの英語、異文化、英語学習に興味を抱いていることが分かる。

入学年度が異なる学生と英語学習動機を比較すると、新しいカリキュラムにした学年の方が全体的に意欲が高かった。このことは、新カリキュラムによって、学生の英語学習動機が高まったことを示している。

コミュニケーションに対する意欲(WTC)

日本語におけるWTCと英語におけるWTCに分けて因子分析(主因子法、バリマックス回転)を通して分析したが、同様の結果が得られた。留学前と留学後の日本語及び英語のWTCの変化を見ると、あまり知らないが身近な人とのコミュニケーションが増えたことが挙げられる。これは、日常の場面で、スーパーマーケットのレジや道端で話しかけられる場合が多いからであり、留学前には予測できなかったためであろう。それは以下のような学生の自由記述にも表れている。

英語だと日本語よりも気軽に話しかけられる場面が多いと思う。例えば道を歩いている、海外ではHiと知らない人でも声をかけ挨拶をし、話をすることがありますが、日本では見ず知らずの人に挨拶をして話をすることはあんまりない(学生C)

しかし、親しい友人同士でコミュニケーションする意欲に関しては、留学後英語、日本語両方とも下がってしまった。留学前に考えていたように現地で必ずしもうまく友人とのコミュニケーションが取れなかったため、日本語においてもコミュニケーションに対する意欲が下がったと考えられる。

英語を専門とし留学を義務づけていない学科の学生と比較した場合、留学を義務づけた学科の学生の方が、日本語・英語における全体的なコミュニケーションに対する意欲が高いことが分かった。一方、入学年度が異なる学年と比べると、差がなかった。

英語 speaking 不安について

留学後の英語 speaking 不安に関して、定性的に分析を試みた。その結果、留学によって学生の英語を話すことに対する抵抗は全般的に下がっている。特に、以下のように日常会話においては、慣れ、自信や積極性が見られ、発音も良くなったと感じている。

日常会話は伸びたと思うので、アカデミックなスピーキングを伸ばしたい。(学生D)

Speakingに自信が出た。Pronunciationや語彙力がアップした。(学生E)

自分から話そうという積極的な姿勢が身に着いたのであがったと思う。(学生F)

前よりは上がったが、まだまだだと思う。頭を使わなくても話せるように上達したい。(学生G)

他の国からの留学生ともかかわることでネイティブじゃなくても会話はうまくいくことを実感したので少しは自信になったと感じる。それでも通じないこともよくあったので不安もまだある。海外の人と話すよりも日本人同士の英語での会話の方が緊張する。(学生H)

しかし、学生G、Hのように、英語を話す技能に関しては個人差があり、まだまだ完全ではないことは学生自身が認識している。

(3)研究課題3: 留学中の英語力と情意面に影響を与えるものは何か。

留学中の英語力に影響を与えるものとして、メタ言語知識が働いていると考え、留学前後に文法知識に関する同じメタ言語試験

を実施した。その結果、留学前後ではメタ言語知識の量は変わらなかった。これは、文法に関するメタ言語知識が新たに増えたのではないことを示している。学生は留学中に主に ESL 等のクラスで、文法に関する知識を習得するが、それを説明する段階まで至っていない。留学前にこの能力は TOEIC や TOEFL iBT との相関関係がなかったが、留学後には TOEIC 及び TOEFL iBT の reading との間に中程度の相関関係を持つようになった。このことは、英語を実際に使う中で、reading の能力とメタ言語知識の関係が深まったことを示している。先行研究からメタ言語知識は読み書き能力に関係することが分かっている。留学によって、英語を使う中で、メタ言語知識が活性化したと言える。また、このメタ言語知識は大学の成績の平均値である GPA と関係があることが分かった。このことから、メタ言語知識が英語力に影響を与えているとは言えないが、読み力や総合的な大学成績と関係していることが言える。

また、質問紙や観察によって、学生の英語に対する動機づけが英語力に影響していることが分かった。留学前、留学中、留学後において、それぞれの局面において、常に高い動機づけを持っている学習者が高い英語力を保持していることが分かった。

今後の課題として、以下の3点が挙げられる。引き続き研究を進めたい。

- (1) 留学によって学生の speaking や writing 技能がどのように変化するのか、流暢さと正確さの観点から分析する。
- (2) 留学前後の学生の動機づけ、コミュニケーションに対する意欲、英語学習に対する不安は、自己効力観(self-efficacy) の関係はどのような関係があるのだろうか。
- (3) 自己効力観は留学する前の学生に対してどのような影響を与えるのか。

5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 7 件)

〔その他〕

http://research-db.dwc.doshisha.ac.jp/rd/html/japanese/researchersHtml/2102/2102_Researcher.html

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

飯田 毅 (Iida Tsuyoshi)

同志社女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：90290212